建築美に関わる魂の三つの能力

—カトルメール・ド・カンシーの建築美論について II—

THREE FACULTIES OF “AME(SOUL)” CONCERNING THE
ARCHITECTURAL BEAUTY

—On the Architectural Beauty in Quatremère de Quincy's Treatise II—

白井 秀和*

Hidekazu SHIRAI

In this paper, I deal with the problem of the faculties of the human soul concerning the Architectural Beauty through the article “Beau” in Quatremère de Quincy's “Encyclopédie méthodique, Architecture (1788)”.

These faculties mean the sense, the understanding and the taste, which correspond to the sensation, the perception and the affection among the human actions influenced by Architecture.

And also these three faculties have deep relationships with the various qualities of Beauty, such as grandeur, force, order, harmony, richness and economy, which constitute three essential parts of Architecture, that is, Construction, Disposition and Decoration.

In conclusion, I elucidate Quatremère de Quincy's Vitruvian way of thinking Architecture, which was based on Platonic idea.

Keywords : architectural beauty, soul, Quatremère de Quincy

はじめに。「魂」を基にした「美」の考察

前稿¹⁾で筆者は、『系統的百科全書・建築』第1巻(1788, pp.255-263)におけるカトルメール・ド・カンシーの建築美論の中の、美の探究の仕方、建築美の特殊性などについて論じたが、第II部の本稿では、前稿で得た「建築芸術の美の解明は、人間の魂の持つ三つの能力を知ることで行なわれる」との指摘を詳細に分析することになる。

さて、ここで魂とは原語で âme, すなわち人間の諸々の精神的能力の総体を指し²⁾, 所謂心 cœur の上位にあって、心の動きを司るものであり、17, 18世紀までの「身心関係論」においても、心よりもより重要な考察対象とされた概念である³⁾。

カトルメールは、この魂の持つ能力(機能) faculté を論じることで、建築美を構成する諸々の性質を解き明かそうとするのであるが、このとき彼の言う能力とは、前稿にも挙げたごとく、感覚器官 sens, 悟性 entendement, 趣味 goût の三つを指している。このような魂の能力の三部分への分化は、遙かにプラトンが、『国家』の第4巻や第9巻、更には『パイドロス』で示した魂

(ψυχή, psychē, プシューケー)の三部分説(ものを学び知る働きとしての「理知的部分」、これの制御に反抗して肉体的欲望の対象へ向かおうとする「欲望的部分」、両者の間にあって全般的に理知的部分を助けることの、怒りに代表される「気概の部分」)にも繋がるものであり⁴⁾, われわれは、カトルメールが、魂という最も全一的な概念を援用することで、建築美を論じようとした点に、その論点の基盤的確さを見ることになる。例えば、プラトンは『パイドロス』の中で、「美のみが、ただひとり美のみが、最もあきらかにその姿を顧みし、最もつよく恋ごころをひくという、このさだめを分けあたえられたのである」と記し、最も鮮明に輝いている姿を持った「美」を核として、この「美の流れを受けいれて翼の芽ばえをうながされた魂を、この窮極に向かって駆り立て、真実在のすべてを全体として想起しようとする努力の源となるもの」すなわち「哲学のエロース」を探究する者、「知を愛するところと美しい人を恋する想いとを一つにした熱情の中に、生を送った」者の魂を論じたが⁵⁾, カトルメールは、まさしくこのような「哲人」或いは「愛知者」の眼差しを以って、建築「美」の問題

* 福井大学 助教授・工博

Associate Prof. of Fukui Univ., Dr. Eng.

を、魂 (âme, psyché, anima) の下に考察したと考えられよう。

だが、カトルメールは、このプラトンの知性の目によって「美」を捉えようとするものの、その探究の手法は、17, 18 世紀のかなり分析的な手法を以って辿られるのである。すなわち彼は、建築美が、感覚作用/知覚作用/情感作用といった三つの重要な作用に関わるとの、基本的な前提の下に論を進めて行くのである。

われわれは、カトルメールのこのような探究の方式 (procédé) が、後に見るように、ウィトルーウィウス以来の建築の三原理〈強・用・美〉と繋がっており、この点において、カトルメールが、建築の古典的規範原理にあくまでも忠実に建築の美を語ろうとしていたことが分かることになる。つまりは、魂に言及することで、プラトンの根源への志向を持ちつつ、建築の三原理に収斂することで、ウィトルーウィウスの普遍的な法則に到達しようとする、まさに彼のその方式から、やはりカトルメールは、揺るがし難い、常に恒常不変のあり方を保つもの＝イデアへの希求を根強くその考え方の中心に置いていたと考えられる。このような方針の下に論じられて行ったこの論考「美」が、後になって全面的に削除されるに至った理由は、次稿第Ⅲ部に俟つとしても、少なくともこの第Ⅱ部においては、以上のような「魂」の能力の考察の跡を詳細に辿ることで、カトルメールの、ウィトルーウィウスの原理への帰着の問題を明らかにし、更にプラトンの魂と美との関わり合いの問題への示唆を呈示することにしよう。

§1. 魂の第一の能力としての感覚器官

上述したように、感覚器官、悟性、趣味の三つが、具体的な魂の持つ能力であるが、各論に入る前に、カトルメールがこれらの能力の前提として、それぞれの能力に対応した、建築の及ぼす以下の三つの作用を定義付けていることを見よう⁶⁾。すなわち、

感覚作用 sensation とは、外的事物の現前によって喚起される判断であり、しかも、どうしてそのような印象を受けるのかの検証のないままに、これらの事物がわれわれの器官に与える印象に応じて下される判断であると定義付けられる。

知覚作用 perception とは、知的能力に従って、或いは、魂が諸々の事物の間を関係を組み合わせて評価する際の手段に従って、行なわれる判断である。

情感作用 affection とは、何ゆえに愛するのかの根拠を深く究めさせることもなく、魂にある事物やある関係を愛するように仕向ける、魂の動きである。

このような定義を念頭に置いて、まず感覚作用に対応する魂の能力である感覚器官 sens についてのカトルメールの論考を見てみる。彼の主眼は、殆どすべての芸術が感覚器官を通してしかわれわれの魂に作用しないものの、あらゆる芸術がこの感覚器官に対して直接の作用

や効力を持っているわけではなく、また、魂に到達するための方途として役立つ感覚器官に等しく同じ遣り方で依存しているわけでもないとする点にある。とりわけ建築は、素材に最も従属した芸術のように思えるものの、恐らくは、最も知的な芸術であるとの基本的認識から、カトルメールは、

「建築芸術が諸々の感覚器官の印象から最も独立してあると同時に、この芸術は恐らくは、それが引き起こしうる肉体的感覚を通した sensuelles 諸々の情感作用によってではなく、この芸術と視覚能力との間に存在するはずの関係によって、目という器官に最も従属してあると言えよう。他の諸芸術は、それらが生み出すはずの効果に対して、目に依存している。建築は、その効果を生み出すために利用する手段においてすら、この器官に依存しているのである。他の芸術は既に、見るという感覚器官 le sens de la vue を確実に満足させているのに対し、建築は、自らとこの器官の間に見出されるはずの尺度 mesure については確かなものは持っていない。他の芸術にとっては、自然のひとつの結果でしかないものが、建築にとっては、ひとつの研究の所産なのである。結局のところ、他の芸術は、視覚 vue に関わり、一方建築は、視覚作用 vision に関わるのである」⁷⁾

と述べる。ここで言われる視覚すなわち vue とは、単に見ることを指し、視覚作用すなわち vision とは、見て解釈することを指すわけである。この差異は甚大であり、言わば vue が人間の意識の対象的側面 (ノエマ) を、vision が意識の志向的側面 (ノエシス) を指しているといった現象学的な解釈も成り立ちうる。更に言えば、建築という芸術は、他の諸芸術のように与えられた対象の単なる像を見るだけではなく、その像に対する高度な知的了解が必要とされるものなのである。この論点は、第Ⅰ部で述べたように、建築に本来備わっている特殊性によるわけであり、こうした建築芸術の高次な成り立ちそのものが、分析し難い建築美の複合性の根拠を形成しているのである。

続けてカトルメールは、視覚器官に対するこの建築の作用こそが、この芸術が悟性とは全く無関係に、諸々の感覚器官に対して持っている唯一の作用であるとし、この作用を建築は、僅かの数の場合 cas と関係 rapports の中にしか持たぬがゆえに、これらの場合や関係を知って良く識別することが肝要であるとする。ここで言われる場合と関係とはすなわち、建築の総体的な寸法 (大きさ) dimension とそれらの寸法の間関係である。建築はこの二つのものによって根本的な影響を受ける。すなわち、目がある特定の拡がりしか心地良く包括することができないため、ある点を超えると壮大さとか力とかいった性質が効力を失い、悪しき過度になるわけである。というのも、目という器官は、余りに大きな物に対して壮大さとか力とかいった観念を評価するために、極度の不快感を蒙るからである。例えば、余りに長くて、目はその端を見定めることのできないギャラリーとか、余り

に高い円柱、余りに幅の大きな建物など、行き過ぎた寸法（大きさ）は目を疲れさせる。われわれは、このような具体例の指摘から、われわれがかつて本論文報告集で論じたような「崇高」の概念が発現する契機を見ることができるのであるが⁹⁾、カトルメールの場合には、この行き過ぎた寸法は、昇華されることなく、ただの悪しき過度でしかない。この点にわれわれは、カトルメールの一種の限界を見るのであるが⁹⁾、いずれにしろ、過度の大きさは悪しきものである¹⁰⁾。

もうひとつの「関係」の問題については、均一性とか多様性との関わりで論じられる。ここでも余りの均一性は目を弱らせ、その対極である余りの多様性は目を疲れさせるとし、対象物の分割が、目に対し見ることを助けるがゆえに、目に快いと主張される。更に、高さの割に幅が余りにも大きければ、目は幅にのみ気を取られてしまっ、て、建物の全体を捉えることに大変な労力を要することになる。つまりは、寸法の関係は適切な中庸を保つのでなければその効果を得られないのであり、この点でゴシック建築が、その悪しき例の代表として挙げられることになる。

「何故なら、ゴシック建築の寸法の大部分が行き過ぎであり、目は疲れることなくしてこうした寸法を捉えられないからである。更には、これらの寸法の間に存在する関係が、そこではひとつの組み合わせの中に見い出され、この組み合わせが目、この器官が不快な影響を受けたままにされるに違いないような無理な、或いは極めて骨の折れる建物の展開をもたらすからである」¹¹⁾。

次にカトルメールは、堅牢性 *solidité* なる（関係）概念、すなわち、われわれの感覚作用にのみ依存し、悟性とは関係なく諸々の感覚器官に作用しうる更に別の関係を取り上げる。というのも、余りの堅牢性は建物の内部に余りの量塊感や厚みの感覚を引き起こし、そのために目に対して窮屈さが生じるのであるし、反対に余りに堅牢性が欠けている場合には、極端に大きな開口部が幾つも現われ、そのために目にとって混乱した感覚作用や、目が好む休息を目に呈示せぬ漠然とした感覚作用が生じてしまうからである。この堅牢性に関わる両方の極端さは、寸法における行き過ぎや寸法の間関係の行き過ぎと同じく目の敵となる。つまりは、視覚器官に対して建築芸術が持つ直接的作用が存在し、更に、そこには、われわれの感覚作用を基本として持っている諸々の関係があって、これらの関係の過剰或いは悪しき組み合わせが、この器官を、その能力に有害な状況へと追い遣るわけである。

このことは、絵画の場合の色彩 *couleurs* の持つ関係に譬えられる。もっとも、色彩が目への友であるのに対し、建築に見られる関係は上述のように目の敵ではあるが。しかし、もし度を越した関係や不一致な関係の持つ効果が、不調和な色彩の持つ効果ほどには有効に（勿論否定

的な意味にであるが）目に作用しないように思われるとしたら、それは、

- 1° 目が素早くこの関係の効果を紛らわせること、
 - 2° 視覚という感覚器官が比較対照を感じるには、建築の場合には、色彩の場合ほど多くの比較点がないこと、
 - 3° この感覚器官が関係を対象とした教訓を殆ど何も受け取らず、このことについて大部分の人々が殆ど鍛練のないままであるため、この感覚器官が、未だかつて音楽を聞いたことのないような野蛮人の耳のように、不完全な状態のままに判断を下さざるをえないままであること、
- などのためと考えられるとカトルメールは言う¹²⁾。つまり、ここには魂の知的な部分である悟性が欠けているのである。悟性こそは、度を過ぎた諸々の関係の与える骨の折れる感覚作用の数々を、もっと容易にそしてもっと迅速に、この目という感覚器官と連動して受け取るものであり、度を過ぎた関係は、確かにまず以ては悟性とは関係なくこの感覚器官を動かすことができるものの、それでもなお、この悟性との符合を排除することはないのだから。

このようにカトルメールは結局、悟性の登場を招来するのではあるが、とりあえずは感覚器官とりわけ視覚能力を論じ切り、次のように述べることで、美の諸性質の中の壮大さと力という性質を抽出する。

「従って、諸々の感覚作用は、悟性とは無関係に、総体的な寸法とそれらの寸法の間関係によって動かされることができる。われわれは、これらの効果に類比した性質が、壮大さ（大いさ）と力であることが分かった」¹³⁾。

壮大さ *grandeur* と力 *force* とは、筆者が建築の「性格」論（本論文報告集 No. 330）でも述べたように、人間の最も素朴で力動的な能力を指すものであり、人間の根源的力が満ちた始原の時代にとりわけ顕著な性質であった。従って、カトルメールは、「美」の概念の分析にあたって、このような基本的性質を名指すことで、自身の根源的なものへの憧憬を保持しているという見方もできよう¹⁴⁾。

この壮大さと力という性質の抽出は、その後の文章でも力説される。すなわち、諸々の感覚器官がこれら二つの性質の判断者となりうるのは、諸々の感覚器官がこれらの性質から受け取る印象が本性上、知性の助けなどなくとも存在しうるということのためであり、建築芸術において確立される規則は、われわれの諸々の感覚器官に基づけられるようなときには、強固で普遍的な基盤に則って置かれることになるのである。たとえ、次の段階で悟性なる魂の知の力が入り込んで判断が複合的なものになるとしても、感覚器官なる第一義的な魂の能力に基礎付けられた規則に諮ることが重要とされ、従って、視る（視覚作用）という学問 *la science de la vision* が、

建築術的知識 *connoissances architectoniques* の基礎と見なされたわけである。

このようなことから、何人かの著述家が、「美」の根拠のすべてを、われわれの諸々の感覚作用を基に明らかにしようとしてきたわけである。どのような関係であれ皆等しく、視覚能力によって測られることができるという結論が、また、視覚作用の中にあらゆるプロポーションに適用できる不易なる原理を見い出すことが、更に、建築の持つあらゆる関係がこの器官を用いて魂に到達するものと考えられ、この器官が包含するものを超えてこの器官の領域を拡げることが、それぞれ望まれたのであった。しかし、このような態度には根本的な欠陥があった。それは、すべての判断を唯一感覚作用にのみ頼るということの持つ誤謬である。確かに建築は、感覚作用を基に、感覚器官という能力によって、その美の性質たる壮大さと力とを捉ええた。しかし、それだけでは充分ではありえない。このことの認識に思い到らなかった者たちにとっては、

「この（視覚という）器官に固有な諸々の情感作用と、この器官が悟性との協力の下に受け取る諸々の情感作用、或いは、この器官が自らと一体化した悟性による快・不快の情感の判断に応じてしか受け取らないことがときどきあるような諸々の情感作用とが、混同されていたのであった」¹⁵⁾。

何故なら、魂の多様な部分すなわち能力を結び付けている微妙な差異の数々は知覚されえない場合が多く、魂の持つ様々な操作を結び付けている微妙な差異の数々に到っては、それに劣らず知覚されにくいからである。従って、魂のもうひとつの能力たる悟性に頼ることが求められるのである。そうして、上述の様々な関係において視覚という感覚器官の持つ情感作用と混じり合い、しかも、自らがこうした様々な関係から受け取る印象の数々の中で、この感覚器官に大きな位置を占めさせていると考えられる悟性へと考察を深めて行くことで、つまりは、より魂に密着したかたちでの分析によって、建築の美の概念がより一層明らかにされるのである。

§2. 魂の第二の能力としての悟性

建築芸術が働きかけるわれわれの知覚作用に対応する、魂の能力である悟性 *entendement* は、われわれが、建築が与える様々の印象を視覚という感覚器官と共有させる際の手立てとなるものであり、この芸術が、最大数の諸関係によって、この悟性に影響を及ぼすことは疑いようのないことであるとの認識から、カトルメールは悟性の関わりを論じ始める。ここで言われる諸関係とは、前節で述べられたような寸法の関係ではなく、プロポーションのそれである。なるほど、プロポーションの持つ諸々の関係は、魂に到達するために視覚器官を経由するがしかし、この感覚器官の判断によっては、これらの関

係の持つ性質が善いか悪いかの推論を行なうための確かな基準は得られない。何故なら、視角 *angle visuel* の限界、すなわち視覚器官の領域を超え出た寸法に対して、感覚器官はそれが確実に悪しきものであるとの判断を下すものの、仮りにある物のプロポーションがいかに間違っただのものであろうとも、それがこの器官に捉えられるほどの大きさの寸法であったならば、この器官は、最も啓発された知性の成果であり、悟性の領域に属するといわれる完全性 *perfection* に関与しえないのであるから、この器官がこのプロポーションに対して何らの不都合も感じないということが、当然のごとく起こりうるからである。要するに、悟性に影響を及ぼす関係とは、寸法が持つ関係ではなくて、プロポーションが持つ関係なのである。この点で視覚という感覚器官は、寸法（大きさ、規模）の大小に対する判断器官たりえても、プロポーションの善し悪しに対する判断器官ではなく、たとえ仮りにそうであるとしても、つまり悪しきプロポーションが目には不快であることを主張するとしても、それは目を悟性の能力として置き換えるといった誤った言い廻しをしているにすぎない。

「目は、円柱や建物の余りの高さによって不快な影響を与えられるのであり、そこに含まれる善き或いは悪しきプロポーションの持つ様々の根拠から不快な影響を受けることは一切ない。……。円柱が極端に高い場合、視角はかろうじて、辛苦の果てにしか、この円柱を捉えることはない。しかし、円柱に構成要素（基準的尺度）*module* の多小があるとしても、この感覚器官はそれを認めさえない。もし、この感覚器官がこの構成要素を捉え、その比較を行なうとするなら、それは悟性の機関としてあるわけである。この器官が円柱や建物のプロポーションを捉える際に取るような労苦は、それが結び合わされてあるところの知性の労苦以外の何物でもない」¹⁶⁾。

このように、視覚なる感覚器官は、プロポーションの調和のとれた関係によっても、調和が全くない関係によっても動かされないのであるから、建築に関わる調和の諸原理を、光学に基づくせたり、或いは、音楽の調和のとれた関係の基盤と同じ不変な基盤の上に根付かせようとしても無駄な試みとなる。音楽というプロポーションは、音楽に関わる器官そのものに密着してはいるが、建築というプロポーションは、いかなる場合にも器官との関わりはない。それは、例えば、数の間の関係が目には快いか否かと問うたところで、その問い自体が、既にしてプロポーションに関わる問い以外の何物でもないことを明らかにしてしまうわけである。

カトルメールの論点は、結局のところ、プロポーションという概念が知性の側に密着したものであることを強調しているのであるが、このときわれわれは、ウィトルーウィウスの量的構成秩序 *symmetria* と質的（感覚的）構成秩序 *eurythmia* といった二つの概念との関わりにお

いて、*symmetria* の側にこのプロポーションの関係を、一方、*eurythmia* の側に目に関わる感覚上の関係を帰属せしめようとするカトルメールの考えを見ることになる。すなわち、*symmetria* とは「建物の全体とそれを構成する肢体の間、各肢体相互間、各肢体ごとにその全体とそれを構成する部分の間にモデュルスを媒介として計測的に通約関係が存在すること」¹⁷⁾を指すが、ここで言われるモデュルス *modulus* は、カトルメールも構成要素（基準的尺度）として挙げたモデュール *module* のことであり、他ならぬカトルメールの言うプロポーションの関係の基盤を言いあてている。また、*eurythmia* とは「視覚を通じて感得される美しい形姿の原理」¹⁸⁾であり、まさしく、カトルメールの言う視覚という感覚器官に与り、この器官によって直接に捉えられるものなのである。カトルメールは、先に見たように、この *eurythmia* を主として建物の寸法（規模）や堅牢性に関わらせていると考えられるが、いずれにしろ、「美」の理性的認識と感覚的認識の両面を照準としたウィトルーウィウスの洞察の問題を、寸法 *dimension* とプロポーションの対比的な把握能力としての感覚器官と悟性を指摘することで、反復していると考えられ、このことから、カトルメールの考察の底流に頑としてあるウィトルーウィウスの建築原理の理解が見て取れるのである。

このように、「美」の理性的認識に与る悟性こそが、プロポーションの持つ諸々の関係を捉えるのであり、プロポーションの諸規則が基礎付けられうるのは、「器官の物理的な印象に対してでは一切なく、精神的な情感作用に対してなのである。これらの規則が由来するのは、われわれの魂の知識からであり、基礎付けられるのは、この魂の本性を基にしてなのである」¹⁹⁾。従って、精神は複雑な関係よりも単純な関係をより容易に比較考量するがゆえに、単純な関係の持つ効果は、複雑な関係の持つ効果よりも快いものであり、「プロポーションとは、われわれの魂が感じる快感とか、非常な均一性や余りの多様性、うんざりするような対照、そして過度の相称性のためにわれわれの魂が抱いてしまう苦痛とかいった、事物がこのわれわれの魂との間に有している類比の所産に他ならないのである」²⁰⁾。

事物に対する魂の様々な反応の理知的な判断にこそ、プロポーションの当否の問題が帰せられ、結局のところ、美の性質たる「秩序 *ordre* と調和 *harmonie* が、悟性に関わる性質であり、これらの性質はとりわけプロポーションから生ずる」²¹⁾のである。

§3. 魂の第三の能力としての趣味

次に趣味なる美的判断力の場合であるが、先に述べられたように、この問題は、建築がわれわれの情感作用に対しても影響を及ぼすことに基づけられている。そして、

この作用は、感覚器官や悟性といった既述の能力に関わる作用よりも、もっと感じられにくくまた認められにくいものでありながらも、より重要なものと考えられる。カトルメールは、建築におけるこの情感作用を他の諸芸術における情念 *passions* と対比させることで、このことを強調する。ここでも、建築芸術と他の芸術が、その根本的原理とりわけ模倣に関わる原理の差異の下に論じられ、この情感作用と情念の差異もまた、この原理の差異に帰着される。つまり、

「われわれを想像の世界へ誘ったり、或いは、身体の状態や魂の動きの忠実な模倣によって、われわれに行動を起こさしめる他の諸芸術は、われわれにとってひとつの忠実な鏡となるのであり、情念を揺り動かす芸術とは、狭義には、われわれにこの鏡の中を見つめさせる芸術に他ならない」²²⁾

のである。その一方、

「物質的なものは何も模写せず、その形態が関係や論拠、そしてプロポーションの覆いにしかすぎないような建築は、われわれの内に、いかなる情念をも引き起こすことはできないであろう。しかし、自然が大規模に自ら生み出したものに作用するように、建築は小規模にはあるが、己れの所産に作用することで、自然の持つ手段に殆ど似た手段によって、われわれを引き付ける秘密を見出すのである」²³⁾。

建築の常なる源泉たる自然に立ち帰ってみることは、カトルメールの基本的な考察の態度であるが、ここでも自然の歩みに付き従うことによってしか自然を模倣しえない建築の特殊性が繰り返される。そして、自然が、その諸々の所産を生み出し、その保全を保障し、更に所産それぞれの間の関係を確立した後に、必要によりは快感に関連する諸々の性質をそれぞれの所産に与えて、われわれがこうした性質を受するように促したように、この新たな段階の領野、つまり、われわれの感覚作用や知覚作用によりはわれわれの情感作用により適合した関連性の領野を、建築もまた作り上げなければならないのである。すなわち、建築は、感覚器官では判断しようもなく、悟性自体さえも手中に収めえない性質、快感の持つ関係を評価するために作られた魂の能力たる趣味に関わる性質を、己れの作品に刻印しなければならないのである。更に言えば、建築は、感覚器官や悟性の享受から生ずる快感とは無関係に、魂の情感作用というわれわれをして事物の存在を愛さしめたり憎ませたりする不合理な動きに基づく快感を対象とする。このような快感は厳密に識別されるのがそれほど容易ではないものの、それが生ずる場たる魂の作用が最も苦痛を伴わないがゆえに、最も広く感得されるものである。自然の中に見られる快感の持つ諸々の関係こそは、最も魂を独占し易く、人々が美を広く判断する際の手立てとなるものであるがため、建築の場合にも、大多数の人間の魂に最も生き生きとして最も曖昧でない印象を生み出し、観察の対象として最も本質的であるとさえ言える。

「建築と感覚器官との間の関係は、曖昧で不確定な効果しか与えない場合が多い。建築が悟性に対して生み出す効果は、苦痛や束縛、そしてこの効果を判断するのに骨の折れる注意力を魂に要求してしまう。しかし、快感の持つ諸々の関係は、魂の情感作用の中に、言わば常に開かれ、常に判断の用意のできた裁きの場を見出すのである」²⁴⁾。

この快感の持つ諸々の関係は、建築においては具体的には、装飾術から抽出されることになる。カトルメールは、これらの関係が建築芸術に対してある関わりを、色彩が自然の所産に対してある関わりに準える。そして、確かに建築芸術は装飾なしですますことができるかもしれぬが、建築芸術が動かさうる魂の三つの能力に関連した諸々の性質の合致によってしか、建築芸術は全一的なものとして十全にわれわれを喜ばすことはできないということを強調する。この考えの下に、このような十全な建築芸術を実現するための、この芸術とわれわれの情感作用との間にある快感の関係に依存する性質として、豊かさ *richesse* と節度 *économie* なる概念が挙げられ、魂の能力のひとつである趣味がこれらの性質の判断者とされるのである。

われわれは、ここでもやはり、カトルメールが、ウィトルーウィウスの原理に則っていると指摘せざるをえない。すなわち、装飾術は、ウィトルーウィウスの言う建築の相応しさを表わす原理 *decor* に関わるものであり、建築の外から形を規制する外在的造形原理としてのこの *decor* が、その関連下位概念として *distributio* を従え、この *distributio* の概念がギリシャ語の *oikonomia* に相当し、家政的・経済的な要因を指し示していることから²⁵⁾、先のカトルメールの節度 *économie* (経済性) なる性質の抽出に見られるごとく、カトルメールのウィトルーウィウスへのその関連の深さが洞察されるからである。このように、第1節や第2節での感覚器官、悟性といった能力の場合にも見られたウィトルーウィウスの原理の適用の痕跡から、次にカトルメールが、建築の三つの立脚点〈美・用・強〉の問題へと、これらの能力を、そして美に関わる諸々の性質を収斂させて行くのを見るのは、容易に想像のつくことであろう。

結. 建築の三原理とその統合へ

しばらく、カトルメール自身の言葉に聞き入ろう。

「われわれはここにおいて、建築が利用するいろいろな性質の拡がりや多様性を正確な仕方では確定したり、これらの性質の的確な概念を固定しようと決断したわけではない。……。われわれには、われわれの芸術が関わる魂の様々な能力、そしてこの芸術に関連し、この芸術から作用を受ける能力に対応する様々な性質を認めただけで充分である。

これらの性質は、建築の三つの部門、すなわち建造 *construction*、布置 *disposition*、そして装飾 *décoration* にそれぞれ対応するものである。すなわち、建造に対する壮大

さと力、布置に対する秩序と調和、そして装飾に対する豊かさや節度があるのである」²⁶⁾。

前節で予想したように、ウィトルーウィウス以来の美・用・強の問題に収束するような、建築の三部門がやはり論じられた。ただし、J.-F. ブロンデルなどに見られる用語法とは若干の違い(ブロンデルの言う *distribution* 間取りが、ここでは *disposition* となっている)があるものの、カトルメールの論点は、全体として古典主義建築の理論に完全に則っていると考えられる。

今迄のカトルメールの用語を用いて、それぞれの用語の概念を、原語でウィトルーウィウスの美・用・強と繋げてみると下のようになる。

- 1° [強] *firmitas—construction—sensation—sens—grandeur · force*
- 2° [用] *utilitas—disposition—perception—entendement—ordre · harmonie*
- 3° [美] *venustas—décoration—affection—goût—richesse · économie*

すなわち、[ウィトルーウィウスの用語]—[建築の部門]—[建築の作用]—[魂の能力]—[美の性質] という連鎖になっている。

さて、以上の問題をまとめる前に、いささか長い引用になるが、もう一度カトルメールの論考に聞き入ろう。

「これらの建築の三部門は、建築に関連する性質がしばしば互いに混同されるように、それぞれが互いに依存している。このことから、建築に対する魂の諸々の操作や、これらの操作の原理たる魂の諸能力に対する建築の作用を非常にはっきりと評価することの困難が生ずるのである。われわれが行なった区別は、この分類を助けることしかできない。これらのいろいろな性質が、それらが帰属している諸々の能力と同じように、互いに相互的な繋がりを持つことがあるとしても、それにもかかわらず、これらの性質は、それらを互いに結び付ける微妙な差異とは無縁な、それぞれの明確な特性を持っているのである。

従って、建築における美とは、この芸術がわれわれの魂を快く動かさうる際の手立てたるいろいろな性質の原理ないしは結果であるとするならば、この芸術によって動かされることのできる魂の諸々の能力やこれらの能力に対応する性質をわれわれが知っているときには、われわれは、この美のあるべき姿 *ce que doit être ce beau* を言い当てることができないであろうか。

美しい建物とは、建造、布置、そして装飾が完全な一致をみているような建物であることを万人が認めるのであれば、われわれの感覚作用の本性に比例した壮大さと力の中に、そしてわれわれの知覚作用の本性に関連した秩序と調和の中に、更に、われわれの情感作用に類比した豊かさや節度の適正なる分配の中に、美が存在するであろうと言うことが、われわれにはできないであろうか。美は従って、感覚器官、悟性、趣味のそれぞれに類比した性質の合致の中にある」²⁷⁾。

以上の諸々の性質の過不足なき合致 *accord* の中にあるとされた美とは、結局のところ、統合的一致の中にあ

る全一的なるものを指していると考えられる。これは、ウィトルーウィウスの *venustas*, つまり三部門に分かれた後の狭義の美ではなく, *firmitas* も *utilitas* も更にこの *venustas* もすべて含意した「美」と考えられる。

この点をもう一度、順次的に反復してみると、カトルメールは、感覚器官→悟性→趣味とこの順で高次となると考えられる魂の能力に、論理的に沿って、つまり analogue に、建築の美が構成されとするわけである。すなわち、これはウィトルーウィウスの強→用→美の階梯 *gradation* と同じく、フランス古典主義建築思潮に一般的な建造→布置(間取り)→装飾の順次的階梯にも沿っていることを示している。要するに、[sens → entendement → goût]・[firmitas → utilitas → venustas]・[construction → disposition (distribution) → décoration] なる二重の三幅対の中に、そしてこれらの合致、換言すれば統合的一致の中にこそ、建築の持つ至高なる知性の高みがあり、それこそが「建築美」なのである。

単なる感覚器官を通してのより容易な美の認識を経て悟性にとりわけ関わる建築。しかも、この悟性に留まらず、もっと高次の趣味なる美的判断力をも含んだ真に高次の芸術=建築における美は、この三幅対の統合の中にこそあると言われるわけである。

このことは、「美」を狭義の美すなわち装飾に関わる美と同置することに満足せず、強も用も含意した最も高次の段階の統合にこそ本来の「美」を認めるという、極めて広汎な視野(=全体像)の下に考察された「美」を希求するということである。建築美とは、強と用と(狭義の)美の統合の中にこそあるのである。

このように、カトルメールの論じる建築美論は、ウィトルーウィウスの概念に深く結び付きながらも、最終的には、これらの概念を全一的に統合したものの中に建築美を見ようとしている点に特徴がある。そのときわれわれは、いささか唐突に思われるかもしれないが、最初に挙げたプラトンの魂の問題と類比的に、人間本来の欲求の発現たる恋(エロース)が、<美>のアイデアの想起として発現し、究極的に、美が様々の思いがけない相貌を現わすことで、壮大な全体としての「真実在の世界」を作り上げるという観点から、まさしくカトルメールが、「おそろしいほどの恋ごころを駆り立てられた」者、或いは「知を愛するところと美しい人を恋する想いとを一つにした熱情の中に、生を送った」者、すなわち哲人の眼差しを以って、美を考察しえたという先の指摘の正当性(本来性)を、いくらかは理解しえるのではなかろうか²⁸⁾。

魂の問題から美の問題を追求して行く、そのカトルメールの正当性は、彼の意識の深い根源的な有様を如実に示しているが、われわれは次に、彼がこの哲人の眼差

しを以って、建築美についての第2の問い「建築の美は絶対的か相対的か」の問題にいかに対処して行ったかを、第Ⅲ部で見ることにしよう。そして、この第Ⅲ部では、深い洞察に裏打ちされた項目「美」が何故消え去ってしまったかが説明されるであろう。

註

- 1) 拙稿「建築における美の概念—カトルメール・ド・カンシーの建築美論についてⅠ—」,『日本建築学会計画系論文報告集』No.414(1990.8.)所収。
- 2) E. Genouvrier et al. : Nouveau dictionnaire des synonymes (Références Larousse), Paris 1977, p.38 に、âme の説明として、ensemble des facultés morales de l'homme と記されている。
- 3) 塩川徹也:「17, 18 世紀までの身心関係論」,『新・岩波講座 哲学9』p.61, 東京1986所収。
- 4) 岩波『プラトン全集5』東京1974所収の藤沢令夫『パイドロス』解説 p.304 による。このことの詳細は註28)に譲る。なお、アリストテレスは、ブシューケーを理性的・感覚的・營養的の三つの能力に分けた(山崎正一他:『現代哲学事典』p.528, 東京1970)。
- 5) 以上の引用は前掲『プラトン全集5』所収、藤沢令夫訳『パイドロス』の p.190 (250D ~ E) 及び同解説 pp.305-306 による。
- 6) A.-Ch. Quatremère de Quincy : Encyclopédie méthodique. Architecture, tome I, p.258, Paris 1788.
- 7) Ibid.
- 8) 拙稿「E.-L. ブレの建築(論)における崇高性の問題—ブレの自然の哲学—」,『日本建築学会論文報告集』No.330(1983.8.)所収参照。
- 9) 『系統的百科全書・建築』(『建築歴史辞典』も同様)には、「壮大さ(大いさ) grandeur」の項目はあっても「崇高」の項目はない。
- 10) アリストテレス『詩学』にも、次のような同じ見解がある。「さらに、動物にせよ、あるいは一般にいくつかの部分からできているどのようなものにせよ、美しくあるためには、それがもつ諸部分が一定の秩序を示しているというだけでなく、その大きさにも一定のきまりがなければならない。美しさは、秩序とともに大きさにも依存するからである」。藤沢令夫訳『詩学』,『世界の名著・アリストテレス』p.297, 東京1979所収。
- 11) Quatremère de Quincy, op. cit., p.259. この論点はまさしく古典主義者のものであり、カトルメールがここでは古典主義的体系を忠実に奉じているのが分かる。こうした点にわれわれは、カトルメールのその原理的部分におけるロマン主義的思考と、具体的事象部分における古典主義的思考との余りにも大きな乖離を見るのであるが、前述の「崇高」概念の欠如と共に、カトルメールが「建築観」の中での思考のダイナミズム(拙稿「カトルメール・ド・カンシーにおける小屋の概念」本論文報告集 No.365 参照)を、具体的な建築物を見る際の考察に導入し切れなかったことが、ここに認められる。もっとも、カトルメールのゴシックに対する批難は、例えば建築の「純粋性 pureté」を論じた場合のように(拙稿「建築における純粋性の問題」福井大学工学部紀要 vol.38. no.1 参照),

ゴシックの過度の装飾性に対する批難に、その淵源を持つものではあるが。

- 12) Quatremère de Quincy, op. cit., p. 259.
- 13) Ibid. 傍点は原文イタリック。
- 14) これは、註 11) で述べたような建築観のダイナミズムと繋がる考えである。
- 15) Quatremère de Quincy, op. cit., p. 260. カトルメールはこの箇所で、情感作用 affection を引き合いに出し、感覚器官、悟性、情感作用（これは魂の能力たる趣味に関わる）の総合的な運動を指摘しているが、この問題は、本稿の結論部でもっと詳しく論じられる。
- 16) Ibid., p. 260.
- 17) 森田慶一：『建築論』p. 175, 東京 1978.
- 18) 同書 p. 176.
- 19) Quatremère de Quincy, op. cit., p. 260.
- 20) Ibid.
- 21) Ibid. 傍点原文イタリック。
- 22) Ibid.
- 23) Ibid.
- 24) Ibid., p. 261.
- 25) 森田, 前掲書 pp. 177-178.
- 26) Quatremère de Quincy, op. cit., p. 261.
- 27) Ibid. 傍点原文イタリック。
- 28) プラトンに関するこの部分の引用は、前掲の『プラトン全集 5』の藤沢令夫氏の『パイドロス』解説 pp. 305-306 による。なお、前述したプラトンの魂の三部分説、すなわち「理知的部分（ロゴスティコン）」、「欲望的部分（エピテュメーティコン）」、「気概の部分（テュモエイデス）」

に、カトルメールの言う魂の三つの能力を敢えて当てはめてみるならば、（その能力の階梯の問題は別として）それぞれこの順に、悟性、感覚器官、趣味が対応すると考えられる。プラトンは、『パイドロス』において、「理知的部分」を馭者、「欲望的部分」を悪い馬、「気概の部分」を善い馬に譬え、これらの部分間で行なわれる葛藤の様子を見事に描写している（前掲書 pp. 197-199. 253C～254E）。すなわち、愛する人の光りかがやく容姿を前にしたとき、馭者が、自らの記憶が美の本体へとたちかえり、それが節制とともに清らかな台座の上に立っているのをまのあたりにして怖れにふるえ畏敬に打たれた後、悪い方の馬を説き伏せてへりくだった心にさせ、自らの思慮深いばかりに従わせることにより、ついに、恋する者の魂が愛する人の後をしたうとき慎しみと怖れにみたされるに到ることになるという場面を（以上の文章は藤沢訳による）、カトルメールの用語を用いて準えれば、それが、（事物に対する直接的な反応を示す）感覚器官が、（理知的な）悟性と（節度と慎しみを持った）趣味によって制御され、三者一体となって美の本体に迫るといった事態に他ならない、とは言えまいか。カトルメールがプラトンの『パイドロス』のこの描写を知りえたかどうかはともかくとして、カトルメールが魂を用いて美を論じたその考察の方式には、このようなプラトンの発想が明らかに存在していたと考えるわれわれの指摘は、果たして唐突であろうか。

（1990 年 7 月 9 日原稿受理, 1990 年 8 月 30 日採用決定）